

## ことばの彼方

— 現実・愛・洞察 —

現実とは、ただ一つ、瞬時瞬時にその全体が新鮮なそのつどの現実のみである。比類のない単純な全体者にして唯一者であるこの現実を措いてほかに、現実はない。それは時々刻々の存在であり、その全体が刻々誕生してはた・だ・ちに消滅するものであり、そのつどその全体の誕生と消滅は統合されている。この統合、誕生と消滅の統合を洞察することができなければ、現実を洞察することはできない。われわれは、人間の生涯や一つの文明のサイクルについて語るとき、誕生、そして成長、成熟、やがて老化、最後に消滅という流れのイメージを念頭に置く場合が多いが、このイメージで理解されているような仕方では、現実にあつて、誕生と消滅が統合されているわけではない。（実は、人間の生涯にしても、その現実的な姿は、右のイメージで理解されているものとはずいぶんかけはなれたものなのだが……）現実とは、たしかに誕生する。だが、現実とは、ひとまず誕生すればその後しばらくは存続しそして最後に消滅の時を迎えたとはいったものではない。現実にとつての誕生と消滅は、人間の生涯や

北岡 崇

一つの文明のサイクルに関する通常のイメージによりは、むしろ人間の呼吸に似ている。呼吸と吸気の交替が人間を成立させるように誕生と消滅の交替が現実を成立させる。だが、誕生と消滅が統合された単純な全体者としての現実にあつて、その交替は間を置かずおこなわれる。呼吸のように順次交互におこなわれるのではなく、誕生と消滅は同時である。現実とは誕生しつつ同時に消滅し、その消滅が同時にそれ自身の誕生であるような存在である。現実とは、時々刻々、誕生しかつ同時に消滅するというその一回かぎりの姿において、絶えず更新される現在という時、絶えず過ぎ去りつつあるものとして現前し現前しつつあるものとして過ぎ去る今という時、この針の先ほどの広がりもない時の先端に花咲く新鮮な全体者、宇宙、世界にはかならない。現実がそのようなものであるからこそ、その誕生と消滅は、今という瞬時の場で、つまり同時に、不可分に結束しているのである。そのつどのものでしかない現実は、その全体の誕生時においてすでにその全体の消滅への移行行きが成就し、ま

たその全体の消滅そのものが同時にその同じ消滅する全体の誕生（ないし完成）への過ぎ越しの成就である。（人間の生涯にしても、その現実の姿は、生誕と死の統合、今という瞬時の場における同時的統合にある。）このような相互的な移り行き、現在という瞬時における、誕生と消滅の両項間の過ぎ越しの完了、これこそが、現実の在り様である。古来、人々は、誕生と消滅の両項間の移り行きのない過ぎ越しに関わるさまざまなイメージをつくりあげてきたが、その中でも、通時的にも共時的にも人々の間にもつとも広くゆきわたり、もつとも深く受け入れられている（当人はこのことを自覚していないかもしれないが……）と一応みなすことのできるイメージとして、生、次いで死、そして再生（ないし新生）というイメージがある。だが、このイメージもまた、現実を成立させる統合には適合しない。このイメージにおいても、先のイメージにおいてと同様、現実を成立させる統合、つまり誕生と消滅の同時的統合のその同時性への洞察が欠如しているからである。あるいは、そのような同時性への洞察が不十分であり不鮮明であるからだ。現実とは、一定の長さをもつ時間という場においてのみ、また一定の長さをもつ時間を介してのみ、成立するといった存在ではない。今に花咲く現実とは、その同じ今に死に絶える。花咲くことは、花が死ぬということなのである。……何にせよ、そもそも、この今以外のどこかで現実が成立できるのだろうか。時々刻々更新される現在というこの瞬間以外に、現実の成立する場が、どこかにありうるのだろうか。もし、そのような場があるなら、現実を、一概に、その誕生と消滅が、またその花咲くことと死に絶えることが同時的に統合された存在として、語ることはできないということにもなるのだが……。

今は、瞬時としての現在であり、それゆえ今には、それを場と呼ぶことができるほどの広がりがある、と云う人がいるにちがいない。現実には何にせよ、何ものかが成立する場であるなら広がりを与えていなければならず、それゆえに、実際に場と呼ぶことができるのは、針の先端のような今ではなく、むしろ、その今をその前後両側からはさみこむ過去や未来の方であり、現実とは、この過去や未来に成立するものであるという見解の人である。ここでは、やはりひとまずは、このような見解の人の言い分に耳をかたむけながら、推論を進めてみることにしよう。なるほどたしかに、われわれが、瞬時としての現在と記したり、それは針の先端のようだと語ったり、それどころかもつと簡単に、ただ、今という文字を書いたり、イ・マと発音したり黙読したりする間にも（どれほど大急ぎで発音したり黙読したりしたとしても）、そのつどの今は、空中にさした手の指の間を吹き抜ける風のように過ぎ去る。したがって、イ・マという簡単な発音でさえ、その発音が現実になされるためには、つまりその発音行為が成立するためには、今とは別の、過去という時が、発音行為の成立する場として必要不可欠であるように思える。また、わたしが昨日ランボーの詩を何篇か読んだということは、わたしの記憶に照らしてたしかなことのように思えるし（断片的になら、憶えている詩句を口ずさむこともできる）、テレビの天気予報では、気象予報士が明日早朝に台風が九州に上陸するだろうと語っているが、現実の成立する場として、現在の瞬間ではなく、過去や未来という時が承認されないとすれば、右に述べたような詩を読んだことや台風の上陸が、成立した、また成立するだろう場が、なくなつてしまふのである。こうしてわれわれは、必要に迫られて——と言つ

でもこの必要は心理的なものにすぎないのだが、刻々更新される今という時よりも、過去や未来の方がはるかに大きなリアリティをもつと思うようになったのである。そのことなら理解できる。

だが、人は誰でも、過去や未来から解き放たれて現在に没頭するということを経験しているのではないだろうか。そして、そのように今という瞬間に完全に没頭する者なら、昨日や明日に対して、つまり過去や未来に対して、固有のリアリティを認めることはないのではないか。それどころか、昨日や明日、過去や未来という観念さえ彼はそのとき、もちあわせてはいないかもしれない。そのような事態をかすかに連想させることばとして、たとえば、自分の身に吹きつける風と真剣に語りあう無名の人物に訪れたフレーズ、――

.....

風のことばが、この身を奪う。

わたしは、今

過去と未来から解き放たれ

風になる。

今は、風とわたしが合一し、わたしたちが一個の

渦と化したこの場所から

風でありわたしであるような、また

風でもなくわたしでもないような、霊妙な

生の波動が世界にしみとおってゆく。

世界は今、成熟し、よく熟れた

黄金の稲穂が風に波打ちうねるようだ。

.....

――という

フレーズを挙げることにしよう。ここでは、「わたし」と「風」とが溶けあうという事態の成立する「場所」が、「過去と未来から解き放たれ」た「今」として語り出されている。「風のことば」との語り合いに没頭する者にとつて、過去や未来ではなく、今こそが、「風とわたし」が合一する場、「一個の渦」が現成する場なのである。右のフレーズに語り出された経験は、めずらしいものではないし、特異な感性をもった誰か個性的な人物に固有の経験というわけでもない。われわれと風が、あるいはわれわれと大地や水や光が、溶けあって合一するという事態は、たしかにその事態への鮮明な洞察が成立するということは人間にあつていくらか稀れなことではあるが、事態それ自身としてはむしろ、ありふれた事態であり、われわれが日々普通に経験する事態であると言えるだろう。事実、われわれは、右に挙げたフレーズと響きあう無数のフレーズを、古今東西いたるところに見いだすことができるのである。そのありふれた普通の経験のさなかにあつてわれわれは、「過去と未来から解き放たれ」る。しかし、過去や未来からの解放という事態の経験がそのようにありふれたものであるだけに、ここで今、わたしは、その経験が人間にとつて何か普遍的な意味を隠しもっているのではないかどうか、考えてみなければならぬと思うのである。過去や未来を現実の成立する場として承認することならできるが、現在という瞬間をそのような場として承認することはできないという見解に、われわれは耳をかたむけ、その見解に傾斜するわれわれ自身の心の動きを記したのであるが、やはりわたしは、ここで翻つて、その見解の人にむかつ

て、次のように問い返すことにしよう。―あなたは、現在とは別の時としての過去や未来が現実の場として存在する様子を本当に、見ることが出来るのだろうか……と、このようにわたしは問うのも、やはりわたしには、過去や過去の出来事はもはや存在しないし、未来や未来の出来事はまだ存在しない、と思われるからであり、さらにまた、存在しない過去や未来を、非現実的な想念の成立する場としてならまだしも、現実の成立する場として承認することがどうして可能なのか、不思議に思えるからである。あるいは、あなたは、わたしに対して、あなたの言い分に傾斜するわたしの語ったことばや推論をよく思い返すようにとわたしに助言するかもしれない。つまり、昨日わたしがランボオの詩を読んだことや明朝の台風上陸の予報をめぐるわたしのことばや推論のこと、を。それなら、これらの事柄についてよく考えてみよう。だが、考えれば考えるほど明らかになるのは、わたしが本当にたしかなこととして意識しているのは、昨日詩を読んだという記憶だけだということではないだろうか。気象予報士が本当にたしかなこととして意識しているのも、台風上陸の予想だけではないだろうか。あなたの場合も同様で、あなたが過去や未来の出来事として語る出来事について、あなたが本当に意識しているのは、記憶や予期だけではないのだろうか。もしもそうであるとすると――と言っても、実際わたしにはそうであるとしか考えられないのだが――結局、あなたも、わたしも、あの気象予報士も、誰一人、過去や未来が現在とは別に現実の成立する場として存在する様子を直接に見てはいないということになる。というのも、われわれが直接に見るのは記憶や予期だけであり、これはこれですのつどの現在にしか成立しないものであり、それゆえ過去の出来事

とか未来の出来事と言われるものも、実は、この今という瞬間に咲き乱れかつ死に絶える現実という花のたとえばせいぜい花弁の一片であつたり、その花を彩る色彩のニュアンスの一つでしかないということになるからである。要するに、そのとき、過去や未来は、現在とは別の時ではなく、現在という時、今という場においてこそ成立する時であり、その圧倒的なリアリティもすべて、今という時に依存するリアリティだということになり、過去や未来の出来事とは、その今に成立する現実の影ないしせいぜいかけらとして、究極のところやはり現在という瞬間を俟って成立するほかないということになるのである。過去や未来の出来事と言われる出来事がすべて、時々刻々絶えず更新される今に依存することを洞察すれば、その人は、もう、今とは独立の過去や未来、さらにはそのような過去や未来の出来事が存在するとは考えることができない。その人は、何にせよ自分が意識するものはすべて現在という瞬時の場に成立する現実、つまり単純な全体者であるそのつどの現実には包括されたものとしてしか考えることができない。過去や未来の出来事と言われるものも、それ自身に何らかの現実性が具わるかぎりには、その現実性を、この現在という瞬間、この刻々の今という瞬間に成立する単純な全体者としての現実から借りてきているのである。つまり、この現在は過去と未来を己れのうちに包括し、そしてこの現在という刻々更新される園に一瞬咲いてはただちに死に絶える単純な現実、過去や未来の出来事と言われる出来事をも、それらが現実性を持てるかぎりには、すべて完全に己れのうちに包括しているのである。それゆえ、この今、この現在は、そしてここに成立する単純な全体者である現実、永遠性をもつ。にもかかわらず、この永遠性は、そのつどの

ものであり、時々刻々の永遠性である。この意味において、今は、そして単純な唯一者にして全体者である現実<sup>③</sup>は、絶えず新鮮な永遠の現在、絶えず新鮮な永遠の現実であると言える。

それにしても、過去や未来という時を、また過去や未来の出来事を（とりわけ過去、また過去の出来事を）、現在とは、また現在の出来事とは関わりのない別のものとみなす思いは、人間の心に深く根を張った強固な思いである。このような強固な思い込みの問題点を鮮明に意識するために、こうしてまたこの強固な偏見を前にしてもつねにその偏見たることの意識を保持するためにも、わたしは、ここで再度、過去と未来の間にはさまれて過去と未来を区別する現在という、現在のイメージを考察してみたいと思う。それは、先にわたしが、過去や未来の方こそが現実の成立する場であつて、現在という瞬間は、何ものかを成立させる場としては狭すぎるとする見解の説明に際して提示したイメージである。そのように考えられた今、現在、とは、過去との対比で言うなら、過去の終わりであると言えよう。また、その現在の広がりは無限小であるから、過去との対比で言うかぎり、過去の終わりということ以上のもではない。ところで、過去の終わりとは過去が過去でない時と接する過去の端であり限界であり縁であるから、それ自身、過去であると言ふこともできる。しかしまた、過去の終わりであり、そのようなものとして過去であるとも言えるこの今、現在、とは、未来との対比で言うなら、未来の始まりである。そしてまた、その現在の広がりややはり無限小であるから、未来との対比で言うかぎり、未来の始まりということ以上のもではない。ところで、未来の始まりとは未来が未来でない時と接する未来の端であり限界であり縁であるから、それ自身、

未来であると言ふこともできる。まとめると、過去の終わりは過去の端であるがゆえにやはり過去であり、未来の始まりも同様にして未来であるのだから、過去の終わりにして同時に未来の始まりであるこの今、この現在は、それ自身、過去であり、同時に未来である。過去と未来の間にあつて両者を区別するために、現在という瞬間は、それ自身、過去であるという特性と未来であるという特性を合わせもつ、いや、むしろ、それら両方の特性を同じ一つの特性として己れにおいて統合していなければならない。過去にして未来であるという現在の觀念があつてはじめて、過去と未来の間にはさまれて過去と未来を区別する現在という、現在のイメージが成立する。すなわち、このような現在のイメージにして、すでに、過去であり未来である現在なくては生じないのである。過去と未来が、過去や未来とは別の現在をその前後両側からはさんでいるというイメージそのものが、過去にして同時に未来である現在という現在の觀念に依存しているのである。

あるいはまた、別の側面から考えてみよう。すなわち、厚さ無限小のハムを両側からパンではさんだハム・サンドのたとえて、問題の、現在、過去、未来、のイメージを捉えることができるだろうか（その際、両側のパンはかなりぶ厚い！）。できるとするならば、そのイメージは、あるかなきかの現在を、過去や未来と同時的なものとして捉えていることになるが、その同時、つまりハム・サンド全体が存在するその時とは、いつであらうか？ その同時と言われるときとは、時々刻々更新される今、この瞬間としての現在を措いてほかにはないだろう。したがって、この考察によつても、今、現在のこの瞬間に、過去も未来も包括されているという結論になる。こ

の包括的な現在があつてはじめて、ハム・サンドのイメージが可能になるのである。<sup>(3)</sup>

それゆえ、やはりわたしは、現実とは、時々刻々の現在に花咲きかつ死に絶える単純な全体者であるというはじめのことはのもとに帰ってゆこうと思う。ただし、このことばに対する批判的な見解に耳をかたむけるとともにさらにその見解を批判的に考察するという迂路を経た今、あのはじめのことばは成育し、その含意はいくらかゆたかになつてゐる。現実が成立する場である刻々更新される今は過去や未来をも包括する永遠の現在であるということ、そしてまたその今に成立する現実も永遠の現実であるということ、しかもこの永遠性そのものが時々刻々のものであり絶えず新鮮なものであるということ、これらのことが明らかになつた。だが、現在と現実の觀念が成育し、その觀念の含意が開かれれば開かれるほど、いくぶん奇妙な印象を与えるにちがいないあのはじめのことばの奇妙さも、ますます強烈になつてゆくようだ。つまり、あの逆説に満ちた現実の觀念、すなわち瞬間としての現在においてその誕生とその消滅が同時に統合された単純な現実という觀念が、過去や未来という時の現在との同時性（現在性）の觀念を介して、誕生しかつ同時に消滅する永遠なる現実という単純な全体者の觀念へと成育するプロセスは、われわれの思考を、迷宮に誘ひ込む。現実は、われわれがそれをことばで捉えようとすればするほどわれわれに、迷宮としての姿をますます鮮明に提示してくる。なぜなのか……。われわれのことばが現実の解明を進めれば進めるほど、われわれのことばは、現実を、謎として、迷宮として、底知れぬ深みをもつた秘密として語ることになる。なぜ？ ……いや、……むしろ、案外これは、……

当然のことではないだろうか……。

現実とは単純な全体者である。そしてこの単純性に、現実を捉える際の困難と容易さのすべての原因がある。ことばは単純なものを捉えることができない。それ自身ことばの一種としてことばの一つの極限に位置する形式論理をもつてしても、単純なものである現実を捉えることはできない。とはいへ、ここでわたしは、単純な全体者たる現実が時々刻々のものである一方、それを捉え表現しようとする人間のことが、また論理的考察が、書記上も発音上も一瞬にして完成するわけではないという理由で、ことばが、また形式論理が、絶えず更新される今に、そしてその今に開花し死滅する単純な現実が遅れをとると言おうとしているのではない。そもそも、知識がことばに依存する場合でも、だからといってその知識にとつて、発音や書記は必ずしも不可欠なものではないからである。だが、ことばは、分別とは不可分である。だから、知識がことばに依存する際は、知識は分別に依存する。そして、分別と不可分であるがゆえに、ことばは、そしてまたことばに依存するかぎりでの知識は、単純なものを捉えることができる。分別、分別と不可分なことば、そしてそれらに依存するかぎりでの知識は、差異の体系をたずさえて現実に向かう。しかし、現実とは、単純な全体者として、一切の差異の彼方に、あるいはまた一切の差異の手前に成立する。分別やことばから解き放たれれば、現実を、その単純な姿のままに洞察するのは容易である。しかし、差異の彼方に、また手前に成立するものを、差異の体系でもつて捉え表現しようと試みることに、ここに、分別や、ことばや、それらに依存するかぎりでの知識が捉えるものの非現実性の根拠がある。したがって、言語的構造をもつものの代表

的な例と言える科学的知識は、現実をその単純な全体者としての姿において捉えてはいないという意味において、非現実的であり、もちろん小説、詩、等、一切の文学作品は、同様に非現実的であり、宗教もまた、いくつかの教義に依拠するかぎりには同様に非現実的であり、社会通念もまた非現実的である。差異の体系を用いて、単純な全体者である現実をいくらかでも捉えようとするのは、ザルで水をすくいとしようとするようなものであるし、風をこぶしでにぎりしめようとするようなものである。何滴かの水をすくいと、風の少量をにぎりしめるかもしれない。しかし、言語的構造の彼方、一切の差異の手前に成立する単純な全体者としての現実の秘密は深い。その秘密への洞察は、分別とことばが終わるところにのみありうる。あえてその洞察を語ろうとすれば、その表現は、逆説に満ちた表現、傷つき血を流す自己破壊的なことばから成る異様な表現となるにちがいない。他方、その秘密への洞察なしに、われわれが、分別、ことば、形式論理、ならびにそれらに依存するかぎりでの知識に頼ろうとすれば、われわれはかならず現実から脱落し、影の薄い抽象の世界を浮遊することになる。そしてわれわれは、単純な全体者である現実から遊離した文化・文明という虚構の繭の中で虚構の蚕のように暮らすことになる。文化・文明の中に暮らす人間はみな、この意味において、単純な現実へと開かれていない繭入蚕、箱入娘である。このような人間が、現実への洞察を欠いたままことばを語るとき、たとえこの者が未来のことを語っても、彼はかならず単純な現実が遅れをとり、単純な現実から遊離し脱落する。むしろかえって、未来のことを語る者こそ、彼はたいてい将来を先取りし現実に行きずる心持ちでいるがゆえに、現実が遅れをとっていることの自覚に

欠け、こうして彼は、自分自身の在り様の非現実性の感覚を喪失したまま抽象的な世界を浮遊することになる。しかし、いずれにせよ、分別と不可分のことばは、差異の体系をもつてはじめて機能するようになることばも、その誕生と消滅が今という瞬間において統合された、そのつどの単純な全体者である現実を出し抜くことはできない。現実の方こそ、人間のすべてのことばを出し抜き、すべての人間のことばをふるい落とす。そうでないような現実とは、単純な全体者であるような現実ではなく、ただの想像物、人間のことばにかたどられた構築物、案出物であり、フィクションである。したがって、たとえば、将来を先取りするプランなどと言われるものは、フィクションの設計図・下図・企画・構想であり、フィクションのプランニングであり、そのプランないし構想の実現とはフィクションの成立のことなのである。そしてこの種のプランないし構想の実現は、現実への洞察とはまったく別のことである。それ自身が万物の創造にして万物の破壊である単純な全体者である現実とは、人間のことばにはおさまらない。人間のことは、ただ一つ真に創造的であつ真に破壊的な単純な現実から、原則的に脱落している。論理の整合性を追求したり、学術論文を書いたり、小説や詩を創作したりすること、このようなことは、それだけでは少しも創造的ではないしまた破壊的でもない。人間のことは静まり、絶滅するところに、創造にして破壊である単純な現実が成立する。人々の間でその創造性が話題になる文学作品や科学上の新理論でさえ、宗教上の教義や社会通念やさまざまなイデオロギーや理念や理想や空想、臆見、偏見、思い込み、そして夢や単なる世間話、などと同様、単純な全体者である現実、現在に咲きかつ滅びる花からの脱落の刻印を負っている。そ

の種のもののなかでもつとも創造的なものでさえ、わずかな体験や  
かぎられた経験、若干の情念やいくつかの思念、そして仰々しい理  
念、などの反復、関係づけ、複合であるにすぎない。単純な全体者  
である現実への洞察を欠く者にとつては、何か目新しいものを案出  
するというのが、可能な限度である。人々の間で創造性などと称  
されもてはやされるものの何という正体、何というからくり、何と  
いう馬鹿らしさ、何という子供だまし。われわれが創造的にして破  
壊的になりうる唯一の道は、……いや、道などはない、……創造と  
破壊の源泉は、それに気づきさえすればわれわれの足もとに開かれ  
ているのだから、今ここで、それへの洞察を得ることができなけれ  
ば、どんな道をたどつていつても、また道をどこまでたどつていつ  
てもその源泉にいたりつくことはないという意味において、道など  
はない、……むしろ唯一の在り様と言うべきだ。その唯一の在り様  
は、われわれが現実を洞察することにおいて現実と一つになるとい  
う在り様以外にはない。だが、分別、ことば、これらに依存するか  
ぎりでの知識は、単純な現実への感受性を歪め、人間に具わる、現  
実を反映する鏡をくもらせる。つまり、人間を現実へと開かない。

現実への洞察、単純な全体者である現実を洞察すること、これは、  
分別やことばの働きではないし、それらに依存するかぎりでの知識  
でもない。知識が、科学的知識においてもつとも明らかかなように、  
主体・客体の区別を前提し、ここにおいて分別を前提するかぎり、  
現実への洞察は、知識とは異なる。この洞察は、その区別以前ない  
しその区別の彼方、つまり分別以前ないし分別の彼方に成立するも  
のであるからである。したがつてこの洞察に際しては、洞察はある  
が、洞察される客体と別のものとしての洞察する主体なるものはも

はや存在しない。洞察という働きは、特に主体というわけでもなく  
特に客体というわけでもないがしかしまた同時に主体でもあり客体  
でもある単純な現実がおこなう自己直観の働きである。分別を前提  
する知識は、現実のこの自己直観にはとどかない。この直観が成立  
するところでは、知識は沈黙し、洞察する主体は、洞察される客体  
とは別のものとしての己れを捨てて、現実と溶け合っている。こ  
こでは、知る主体はあとかたもなく消え去り、自己直観する単純な全  
体者たる現実のみが現成する。何ものかの現成にむけて主体が己れ  
を捨てることが、愛であり謙遜であるのなら、現実への洞察は、  
愛と謙遜のあるところのみありうる。そしてその愛と謙遜は、主  
客の区別を前提する知識の終わるところ、分別が絶え、ことばが止  
んだところのみに生まれる。分別、ことば、そしてそれらに依存す  
るかぎりでの知識は、ことごとく、知る主体の（あるいは知る主体  
という）軽率か不遜を証する。軽率と不遜の終わるところに、愛と  
謙遜と洞察が生じる。愛と謙遜と洞察が不在の場にも、これら三者  
への憧憬なら成立しうる。だが、逆に言うなら、そのような憧憬が  
成立するときは、まだ、洞察も愛も謙遜も欠けている。そこにも、  
プラトンの言う哲学、すなわち愛知エロシディアなら成立しうる。プラトンの言  
う愛は、洞察への憧憬であるからだ。そこには、また、知る働きの  
行使にあたつて禁欲主義を徹底することによって、客体があるがま  
まに捉えたいと願う科学者魂も、成立しうる。しかし、そこには、  
愛を充実する洞察は欠けているし、己れを捨てきるまでの禁欲、す  
なわち愛と謙遜も欠けている。憧憬、すなわち愛知エロシディアの活動や、科学  
の動向は、単純な全体者である現実を見いだそうとするあがきであ  
り手さぐりである。ここではまだ、知る者と知られるものの、愛する



者と愛されるものは、区別され切り離されている。愛されるものと愛する者が、また知られるものと知る者が隙間なく単純に一つであるような充実した愛や現実の自己洞察は、ここではただ、求められているにすぎない。分別とことばとそれらに依存するかぎりでの知識が、憧憬の人、愛の人を、現実から脱落させ、愛と洞察から遠ざけている。彼もまた、彼なりに、愛を知り、知識をもつ。しかし、その愛や知識は、絶えず、不安や懐疑のさざ波に洗われている。彼はまだ、不安や懐疑の忍び入る隙のない、それゆえに不安や懐疑に抵抗するための理念や理屈の介入する隙もない愛と謙遜と洞察を知らない。彼はまだ、単純な現実への洞察が生まれる際の充実した歓喜、底知れぬ深みをもった幸福を知らない。

単純な全体者である現実へと開かれ、現実を洞察するとき、……その誕生と消滅が瞬間において統合されている単純な全体者と一つになるとき、……わたしに自由を期待させることはあるかもしれないが決してわたしを現実にするのでないさまざな知識、あらずもがなのわたしの知識、人間性とか正義とか美德とかその他諸々の社会倫理に関わる言辭、こうしたものが剥落し、さらにわたしということばで通常わたしが自己了解する内容がその空疎を露呈し消え失せ、それとともにわたしの趣味、習性、傾向性もすべて消え失せ、わたしの名も消え、今という時の先端に咲きかつ滅びる花にすべてが委ねられるとき、……わたしはもはや何も望まず何も意志しない、……わたしは、現実という晴朗な大気へと放たれる、……このとき、わたしは、現実を受容する器なのか、……あるいはむしろ、現実が、わたしを受容する器なのか、……いや、現実がわたしを食い尽くす今、わたしと現実の一つであって、わたしが器で

あるにせよ、現実が器であるにせよ、もはや器とそこにおさめられているものとの間に差異はない。容器と中身、形式と質料、型と内容といった区別、分別は、もう存在しない。……今、現実はその単純性を保持しつつ自己自身へと折れ曲がり己れ自身を直観する、……今、わたしは、自己直観する現実と一つになって、そこにわずかたりとも隙間はない、……現実のあの誕生と消滅の統合に由来する、一瞬に凝縮された秘密のリズムがわたしを食い尽くし、わたしは今、生きかつ同時に死ぬ生死の単純な統合体へと解消する。誕生と消滅の同時的統合に成立する単純な全体者である現実は今、わたしや鳥や昆虫や魚や、樹木や草や、岩石や水や風や光を食い尽くし、こうして自分自身を養っているようだ、……食い尽くされてはじめて、わたしや鳥や樹木や何かは、現実のなかに誕生する。現実と一つになったその姿は、文化・文明という鈍重な觀念から成る厚い肉のなかに沈み込んだ視覚、触覚、聴覚、嗅覚、味覚、知性、に映じるわたしや鳥や樹木や何かとは別のものだ。別の姿の存在が、時々刻々の今に誕生しかつ同時に消滅する。わたしは、今、鳥や昆虫や樹木や岩石や光とともに、自己洞察する現実の眼となつて、単純な現実の自己洞察の働きを、無言で眺める。……今、人間のどんなことばよりも充実した現実のことばが、暗闇にひらめく強烈な稲妻のように、放たれる。――何も言うな、無知のことばをもって現実の偉大を小さくしてはならない！

注

(1) 工藤直子、『てつがくのライオン』、理論社、一九九七年、に所収の詩「花」(一二六頁)、を参照せよ。

Presses Universitaires de France, 1970, pp. 1168-1173. 本文に言う「充実した歓喜」「底知れぬ深みをもった幸福」は、参照箇所でベルクソンが「キリスト教神秘主義 (le mysticisme chrétien)」の境地として記しているものに近いかもしれない。

- (2) vgl. Ludwig Wittgenstein, *Tractatus Logico-Philosophicus* (With an Introduction by Bertrand Russell, F. R. S.), London, Routledge & Kegan Paul LTD, 1971, p. 184 and p. 185. 参照箇所に、「現在のうちに生きる者は、永遠に生きる」という魅惑的なことばが記されている。ウィットゲンシュタインの思想とわたしの思想はもちろん同じではない。しかし、その差異を明示することは、本稿にとって重要なことではない。
- (3) とりわけ記憶の場合は、今ある記憶が今とは別の過去の出来事を、それがあつたがままの姿で、あるいはそれに類似した姿で思い出させてくれると、われわれが信じ込みやすいということ（根強い習慣！）については、本稿本文で先に述べた。この信じ込みは一つの偏見であるが、それにしてもなぜこのような偏見が生じるのか、偏見であるにせよ人々の間にこれほどまでも広がり、ほぼ人間の常識と化するまでに強固に根を張ったこの偏見が、現実に対する人間のどのような構えに由来するのか、問うてみなければならぬ。この問題の考察は、どんなに頑強な人間にもすでに深く侵入している病、つまり文化・文明という病の発生源の解明に寄与するであろう。
- (4) 本文に言う「フィクションの成立」とは、たとえば、政策の実現、作戦の成功、組織の形成、その他、で、要するに、文化・文明の成立として一括できるすべての事態を指している。なお、小川国夫、『マグレブ、誘惑として』、講談社、一九九五年、六〇—六一頁、を参照せよ。六〇頁に、「その時私が満足をもって感じたのは、今まで現実だと信じていたものが、実はフィクションだということだった。しかもそのフィクションは自分が望んだものではなく、お仕着せの規制だ、ということだった。なぜ私はこんなに不自然な現状に、おどおどと義理立てして、留まろうとしていたのか。旅に出よう。旅に出ることとは独りになることであるし、独りになることは規制から脱落して（お仕着せのフィクションを見限って）本来の実相に帰って安堵するキツカケを掴むことではないか」と記されている。しかし、本稿の問題は、一切のフィクションの彼方である。

(5) cf. Henri Bergson *Oeuvres*, Textes annotés par André Robinet, Paris,